

「宜野湾高校の生徒達へ（7）」で、コザ高校部活動生徒が発言した「**虚無**みたいな状態」を取り上げ、ニーチェの受動的ニヒリズムから能動的ニヒリズムに向かう必要性について触れた。最近の新聞記事で本校生徒が能動的ニヒリズムに向かっていることをうかがわせる内容があったので紹介する。

まず、「未来つむぐ夏 県高校総体」(琉球新報 6/29)に掲載された本校**アーチェリー部**の記事から(一部引用)。

女子アーチェリーで創部3年目の**那覇国際**と伝統ある**宜野湾**が激しく競り合っている。団体8連覇を狙う宜野湾の牙城を初優勝を狙う那覇国際が崩しにかかる。那覇国際の高江洲未来主将と宜野湾女子でただ一人の3年生、**安次嶺香奈**がそれぞれのエースを背負う。互いに実力を認め合い、**切磋琢磨**してきたライバルだ。「絶対に負けたくない」と開幕前から火花を散らしている。

県内屈指の強豪・宜野湾は団体で女子8連覇、男子4連覇が懸かる。女子の中でただ一人の3年、安次嶺は、好敵手の高江洲へのリベンジに静かに闘志を宿している。昨年の県高校新人は、前半はリードしていたものの、後半に高江洲に逆転を許し、涙をのんだ。自身の課題を「後半のスタミナ不足」と分析。**自粛期間中も筋力トレーニングやフォーム修正**などの克服に費やした。

女子団体は過去最高の7連覇中。さらなる偉業の懸かる大会に「先輩達が残した記録を自分たちの代で終わらせられない」と黙々と的に向き合う。



那覇国際とは対照的に宜野湾には練習場はあるが、学内に指導者はいない。学生時代に全国制覇の実績がある実力者の内間春野さん、県アーチェリー協会の島袋盛範さんらが外部コーチを務めている。**指導に来てくれるコーチのためにも「絶対に勝ちたい」と一射一射に思いを込める**。全国総体や国体への出場機会がなくなった今、安次嶺は「悔いが残らないよう、3年間の実力を全力で発揮する」と力強い。

次は、「#夏は終わらせない 県高校野球」(沖縄タイムス 6/30)から本校**野球部**の紹介(一部引用)。

何度も逃げ出しそうになった時、**グラウンドに連れ戻してくれた友**がいた。宜野湾学生コーチの**山城悠力**は、一緒に過ごした同級生の存在があったから野球を続けてこられた。「ずっと大人になっても関わっていく」仲間への感謝を胸に、最後の夏に臨む。



昨秋大会で8強入りした宜野湾には、2人の女子マネージャーを除いて3年生は9人しかいない。今年1月、内野手の山城は毎日のきつい練習に耐えきれず、「精神的についていけなくなった」と**心が折れかけた**。(中略)

練習もサボりがちになり、池宮城朗監督に「辞めます」と告げた。だが、「このまま大人になっても、ちゃんとした人間になれないぞ」との言葉に思いとどまる。そして何より、「**みんなが止めてくれて、なんとか踏みとどまった**」と語る。

夜、山城の元に「あした、頑張ってきてよ」とLINEが届いた。朝になると、多い時には何十件も着信が。浦添市の自宅には、中城村に住む宮里陽政が迎えに来た。学校からみんなが来たこともある。「**最後は、今の3年生9人で終わりたかった**」(松門龍輝主将)からだ。山城は「迎えに来てくれてほんとうにびっくりして。ここまでやってくれると思わなかった」。思いに応えようと、**学生コーチとしてチームを支えろと決めた**。

本校でも仲間と支え合い、高め合ってきた生徒達がいる。それは、部活動に限らず、クラスの仲間にもいえる。「**切磋琢磨**」の由来は、「骨や玉などを切り、磋(みが)き、琢(う)ち、磨いて細工するように立派な人は、常に修練している」ことだという。先に触れた部員達は、仲間と切磋琢磨し、**受動的ニヒリズムから能動的ニヒリズムに向かった**。

皆さんは、どうだろうか？

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎